

---

翻 訳

---

## ハンス・フォン・ビューローの生涯

—— 1880年～1886年 マイニンゲン時代 ——

マリー・フォン・ビューロー  
最 上 英 明 訳

ビューローがハノーファーでの一連の出来事〔ビューローは1877年秋から1879年秋までハノーファーの宮廷楽長を務めた〕を破局と判断したことで、ザクセン＝マイニンゲン公ゲオルク二世とヘルトブルク夫人は、ビューローのマイニンゲン招聘が、不当に辞任させられたビューローの名誉回復につながると考えた。「報酬は少ないが、自由に活動できる宮廷楽団の監督」とビューローは1879年12月に報告している。「楽団のトップとしてマイニンゲンに滞在して、いつでも好きなときに羅針盤のあらゆる方向に出かけて行っていいのです」と大公は記した（1880年1月28日）。「貴方の国外での活動に支障がない限り、我々の音楽への欲求を満たしてください」とヘルトブルク夫人も加勢し、次のような依頼で結んだ。「高貴な気持ちだけで受諾するのではなく、ご自身のこともじっくりお考えください。貴方は文字通りの『男爵』〔フライヘル（男爵）には自由な紳士という意味もある〕なのです」。

最初から明白だったに違いないのは、年俸がわずか五千マルクでも、自由で独立した活動への保証がビューローの気性には受諾する上での決定的な魅力だったことだ。もっとも、最初は信じていたとしても、それが幻想であったことが、活動そのものの性格、およびビューローの並外れた誠実さと「ドイツ的忠誠」によりすぐに判明するのだが。

1873年にきわめてなごやかに始まったビューローのマイニンゲン宮殿への訪問〔1873年12月28日にビューローは宮廷楽団を初めて指揮した〕は何度か続き、今回の話はそ

の延長上にあった。突然また拘束されるのかと思ったとよそよそしく驚いたのが、ビューローに特徴的ではあったが、何とか「拘束されないこと」が保障され安心した。「マイニンゲンの友人たち〔大公夫妻〕は、私に『辞職する権利』を認めてくれました」。バイロイト基金のためのピアノ・リサイタルに専念した冬が過ぎ、春にイギリスで数週間を過ごしたあと、コンサート、作品の校訂、作曲でミュンヘンを何度か訪問し、残念なことに神経痛の治療も受けた。そして8月下旬、ビューローがリーベンシュタインに到着すると、「そこには宮廷楽団の音楽監督を引き受けるというビューローの電報を受け取ってから、ずっと首を長くして待っていた殿下」がいた。しかし当初、ビューローは身体的苦痛から、「神経痛が許す限りでしか自由に行動できないと感じて」いた。ビューローはもっぱら強制的に宮廷生活の儀礼、社交的な交際や義務などを理解していったが、次の目的である本来の仕事は「マイニンゲンの模範的な演劇活動を交響楽の演奏で小規模に補完する」ことで、肉体的苦痛に悩まされても、ビューローを鼓舞し魅了した。それゆえ、自分のピアニストとしての活動さえ背景に追いやられてしまう懸念を抱くこともなかった。

1880年10月1日から12月末まで毎日、ベートーヴェンの作品だけが練習され、その期間中、9回のコンサートが、最初はマイニンゲンだけで開催された〔Birkinの演奏会記録によれば8回で、9回目はアイゼナハでの開催。詳細は補足資料1を参照〕。12月19日、《第九》の初めての二回公演がなされ、きわめて強い印象を残した。《第九》の二回公演は1881年4月2日（大公の誕生日）にも繰り返された。どのようにして、マイニンゲンの音楽家や楽器だけでそうしたことが可能だったのか。「並外れた作業により、質が量に置き換えられなくてはなりません。才能ある人間は勤勉で、やすりをかけるには時間が必要です。私は完璧に磨き上げ、なめらかにし、光を当て、色をつけます」。ビューローは小さな模範的オーケストラを作ろうとした。「オーケストラのどのパートも、ベートーヴェンのどの音符も、演奏されねばならないように演奏します」。「ベートーヴェンに集中することが、スタイルの基礎を探す条件のように思われます」。

マイニンゲンの小さな宮廷にはオペラがなく、劇場勤務もほとんどなく、こうした理想がすぐに実現ができるように思われた。しかし、実現を妨げる一番の問題が明ら

かになった。「財源が乏しい」とビューローは言った。そのため例えば、優れたオーボエ奏者を招聘するのに、千五十マルクの年俸にビューローは自分の負担で三百マルクの手当を追加した。スパルタ的だが無欲恬淡に生きるビューローには、大公のことをよく考えて努力するのが、よい監督であるように思われた。「実り豊かに儉約できるよう、五十年の人生で今頃になってやっと交渉することを学んでいます。いずれにせよ、私は大公のために、かつて自分のためにしたときよりも上手にやり繰りしました。私のポストは楽で実入りのいい役職とは全然違うのです」。

ベートーヴェンを礼賛することが、ビューローをマイニンゲンに引き止めた第一の要因である。「それがなければ、私はここにはいないでしょう。どんな可能性を見つけても、精神的かつ肉体的な酷使が報われるのですから」と彼はすでに最初の年に語っている。しかし数ヶ月後、宮廷楽団がテューリングゲン地方やフランケン地方で最初の国外での成功を収め、1881年3月に再訪することになったとき、ビューローの努力の成果が初めて結実した。彼は母に次のような手紙を書いた。「私は忠実な楽団に対し、達成された成果への感謝の挨拶で『八十日間ベートーヴェン旅行』と冗談で呼びました。部分的には発見の旅でもありました。私の初めての実践的な練習や勉強のシステムは、『芸術に些細な事柄は存在しない』をモットーに一きわめて些細なことが本質的なものなのです—まったく新しい効果を目指したものでした」。ビューローはこれまでまだ一度も「これほど重要なことをなしとげた」ことはなかったし、こうした「活動のエキスを調合した」こともなかった。

この年の夏、ブラームスが秋にマイニンゲンのビューローのもとへ訪問することを伝えてきた。ビューローのポストの移動は、ブラームスの創作に1870年代、いつも明確な印を残した〔交響曲第1番が初演後に改訂され、やっと出版された直後の1877年10月22日、ビューローはハノーファーで改訂版を演奏したこともあった〕。ひときわ目立ったのはおそらく、ブラームスの《交響曲第1番》をビューローが《第十》と呼んだことであろう。これは音楽界にセンセーションを巻き起こした。ビューローの言葉は、逆説的な言い方で正当な主旨さえかき消してしまうことが多いので、まったく意図しない効果を生んだのだ。「私は《第九》のあとに位置するかのように《第十》と呼んだのではない。むしろ《第二》と《英雄》の間に位置づけるであろう。《第一》はまだベートーヴェ

ンではなく、《ジュピター》を作曲したモーツァルトの作品だと言えるからである」。1877年11月の「ジグナーレ」誌に掲載されたこの公開書簡での説明は、ほとんど顧みられておらず、《第十》の命名がひとり歩きしてかなりの異論を引き起こした。ヴァーグナーでさえ公開の場で、「《第十》と粉飾された交響曲を作った奇妙な作曲家」と嘲笑した。

新しいピアノ協奏曲（変ロ長調）をじっくりと、さらに協奏曲というスタイルに対するあまり愉快ではない見通しを立てることなく試演したいという希望が、ブラームスをマイニンゲンへ引き寄せた。「こうした機会はマイニンゲン以外では得られません。他の土地でも得られるなら、変に思われることもなかったでしょうし、最も愚鈍な音楽監督を選んで訪ねていたかもしれません。ビューローは、非常に気難しくもめ事を起こしがちな人物ですが、才気に富み、真面目で有能な人物です。どうして私がここで彼のもとにいるのか？ 彼の楽団員たちがどんなに徹底した練習指導を受けているか、ぜひ想像しなくてははいけません。我々のような者がそこに加わって、思い通りに彼らと音楽を演奏した場合、これ以上に見事な演奏を他所で体験できるとは思えません」とブラームスはヒラーに書いている。共同作業に熱中した数週間後、1882年1月に大公により計画されたマイニンゲン宮廷楽団初のベルリン演奏旅行にブラームスも出演して応援することが決まった。言うまでもなく、これまで注目されることのなかった小編成の楽団が、[ベルリンで]一度に6回のコンサートを開催するのは、「攻撃」と感じられた。[その後、ハンブルク、キール、ブレーメンで公演したあと]さらに3回のコンサートが続き、ベートーヴェンのコンサートが6回、ブラームスのコンサートが2回、そしてメンデルスゾーンのコンサートが1回開催された[ベルリンでのコンサートの詳細は補足資料2を参照]。最初のブラームスの夕べでは、ブラームスの変ロ長調の《ピアノ協奏曲〔第2番〕》を独奏し、ビューローが指揮をした。二回目の夕べではビューローがニ短調の《ピアノ協奏曲〔第1番〕》を独奏し、ブラームスが指揮をした。演奏は比類のない素晴らしいもので、これまでの苦労、不安、絶望を埋め合わせてくれたと同時に、これまでの活動の正しさをも証明してくれた。三ヶ月前、「この小さな村」への居住を、「豊かな人生における愚行のうちで最も馬鹿馬鹿しい愚行」と母に書いていた。「私は忍耐しながら続けています。仕事嫌いとは正反対の勢いで仕事

しており、台所へ行くことなく給仕された料理を楽しむだけの大公以外の人は皆、何にでも手を出す私のことを感嘆するだけではなく、気が狂ったとも思っているに違いありません」。こうしてビューローは、深く幸福に満ちた偉大な創造的精神の新たな誕生を体験した。彼には無数の称賛の声が鳴り響いた。「大きな期待を抱かせる予感が突然に魅力的な確信となった」。「正確な演奏が不可能だと思われていた個所が、彼のオーケストラで初めて明確かつ明瞭に聞き取れた」。「心の眼に突然に双眼鏡が取り付けられたようになり、霧の中にあった素晴らしい風景が細部にいたるまで完全に認識できる一まさに永遠への眼差し」。「ベートーヴェンの演奏記号に厳密に従って演奏されたデユナーミクのニュアンスが聴衆から魅惑の叫びを引き出した」。「どんな細部でも最高度に磨き上げられている」。「ビューローがベートーヴェンをどのように研究し尽くし、作曲家に最高の称賛を与えることがビューローにとっていかに重要であるかが感じられた」。

外面的に目につくのは、オーケストラが立って演奏し、指揮者が表情豊かな動きにより、オーケストラと盛大な拍手を分かち合い、「集団的名人芸」とも見なされたことである。ビューローの解釈と慣行は、それ以降、楽派を形成した。「かつらの〔作曲家バッハの〕街」ライブツィヒでは、1月20日、1月に入ってから18回目のコンサートが開かれ〔ライブツィヒのプログラムはベートーヴェンの序曲《レオノーレ第3番》、交響曲第1番、《シュテファン王》序曲、交響曲第5番〕、「音楽上の決戦を一点の曇りもない勝利で終えた」（私宛書簡）。「私が祝った勝利はとても文章では表現できない」（母宛書簡）。「私の10本の指だけではなく、50名の楽員との演奏旅行で行くところは、どこでも勝利を勝ち得た」。ビューローは自分の使命を信じ、輝かしい成功のうちにスタートできたことを神に感謝し、「それを持続させ完成させる」ことを望んだ。

ビューローの人生で絶えず繰り返される出来事、それは偉大な成果をあげ、精神的にも絶頂に達した時期に、楽天主義的な波に襲われることである。それが人間としての新しい生き方に向かわせるのだった。それが今回も不可避の運命のように起こった。年をとるにつれ、故郷を失ったような感情、家庭的な面倒を見てもらいたいと思う気持ちが強まってきた。旅館暮らしが面倒になり、マイニンゲンで自分の住居を持つことを決心した。みじめで俗物的で、日常の事柄にはまったく不器用で苦勞も絶え

ない生活では、何らかの温かい思いやりや手助けなしにはやっていけなかったのだ。1874年にはすでに再婚のことを考え始めていたが、心の安らげる場所への憧れが強まった。1877年秋、カールスルーエ宮廷劇場のメンバーとして〔レッシングの〕『ミンナ・フォン・バルンヘルム』のミンナ役を演じている私をビューローが観て、ハノーファーの劇場へ私を推薦し、ハノーファーへの客演で我々は初めて個人的に知り合うことになった。契約は実現しなかったが、手紙のやり取りが始まり、やがて途絶えた。1882年1月、ハンブルクで私はビューローの訪問を受け、マイニンゲンへ客演する申し出がなされた。2月に私はマイニンゲンと契約を結び、その6週間後、私に決定的な言葉が伝えられた。我々双方の前提は、私が芸術家としての活動が続けることだった。「私がいかに貴女の仕事のこと、仕事を続ける必要性を考えているか、ご存じでしょう。私は貴女に相応しい素晴らしいものを貴女から奪いたくないのです」。しかし、結婚直後の1882年8月、1876年のアメリカ演奏旅行のあとの重病と同様の兆候がビューローに表れたことにより、マイニンゲン劇団の三ヶ月の客演への私の参加は不可能となった。こうして、ビューローが律義な性格から念頭に置いていた一種の共同生活の前提が奪われたのだった。

1883年の年明けとともに、ビューローはゆっくりとまたリハーサルをする元気を回復し、1月23日、若き日からの友人で前年の夏に急死したラフの追悼演奏会が彼の指揮で開催された。皆の喜びは大きく、ビューローは救済されたと思った。2月12日、楽団と一緒に我々はマイニンゲンを訪問したブラームスを、駅で出迎えた。その翌日、遠く離れたヴェネツィアでリヒャルト・ヴァーグナーが亡くなった。14日の晩、それをビューローに伝えなければならなかった。彼は押しつぶされるようなショックを受けた。奥底からゆさぶられた彼の心がゆっくり回復し始めるには数ヶ月が必要だった。彼の全生涯でも最も強い激情に襲われたのだった。1883年秋までには、楽団の演奏旅行の再開を検討できるようになるまで、心や体の状態が回復した。ヘルマン・ヴォルフ<sup>(1)</sup>への演奏旅行<sup>(1)</sup>についての手紙が示しているように、ビューローにとって決定的な原動力となったのは、自分の病気中の大公による楽団への超過支出を埋め合わせることだった。この目的のために、「必要があれば」自分のソロ活動さえ犠牲にするつもりだった。「音楽活動全体の本来の芸術的目的を損ねるとしても。

私の使命は、楽団の演奏旅行で赤字を補填して私自身の価値を下げることなのです。何と感激させてくれる使命ではないか！」しかし「現代のメディチ家は芸術で商売しようとする。本来のメディチ家は商売の収益を芸術のために使っていたのだが」とも記している。宮廷楽団の〔ベルリンへの〕初登場のちょうど2年後、凱旋公演が繰り返され、ビューロー自身をも魅了し喜ばせるようなうれしい反応があった。これまでの長い苦悩の時代は消え、忘れ去られた。以前のように、彼の精神状態が浮沈する中、改革者としての理念を貫徹した幸福感に満たされ、〔コンサートで〕スピーチすることがよくあった。半分は冗談、半分はヴァーグナーのために奮闘していた時代の〔ヒュルゼンへの〕古い恨みだったが、大公との最初の実際の不和を引き起こすことにもなった。1884年3月4日、ビューローはベルリン・フィルが当時開催していたいわゆる「ポピュラー」コンサートを指揮し、《預言者》の戴冠式行進曲を演奏したとき、その演奏理由を次のように述べたのだ。「私はこの曲を最近、ヒュルゼンのサーカス小屋〔ヒュルゼンが総監督を務めていたベルリン王立歌劇場〕で見るも哀れに虐待されているのを聴き、一度、きちんと演奏する必要があるのです」。表面上は反駁を受けずに、この即興のスピーチは見過ごされた。しかし、翌朝の新聞で前代未聞の騒動が勃発した。30年間の〔王立歌劇場の〕放漫経営への客観的評価を認めなければならない紙面でもあったが、こうした表現に対し、異口同音に抗議の声が発せられた。ベルリン宮廷からの苦情を受けた大公は気まずい立場に立たされ、ビューローを公的に叱責しなければならなかった。ビューローの方は見捨てられたと思い、皮肉で憤懣をぶちまけたのが彼の性格を表現していた。ビューローは厚紙で作った謝肉祭の仮装用の鼻をつけてオーケストラのリハーサルに現れ、この「鼻」は大公殿下からもらったものだと言った〔ドイツ語の「鼻をもらう」には「小言をくらす」の意味もある〕。

次の冬のシーズンのマイニンゲンでのコンサートの指揮を第二楽長マンシュテット

- (1) 1845年から1902年までコンサート・エージェントとして優れた手腕を振るった。アントン・ルビンシテインのツアー同行者および代理人として音楽業界のキャリアをスタートさせ、ビューローのマイニンゲン宮廷楽団の演奏旅行の手配を請け負った。ビューローはヴォルフの音楽に関する専門知識と機知に富んだウィットに説得され、1887年、ベルリン・フィルの演奏会の指揮を引き受けることに同意し、それまで未熟だったこのオーケストラの基盤を確立させたばかりではなく、ヴォルフに後年のヨーロッパ音楽市場での支配的地位の基盤を築かせた。



に任せ、国外での公演だけを指揮しようとビューローは1884年夏に考えていたが、これは疑いなく正当な主張だった。というのは、ビューローにはマイニンゲンの地位を受諾する前に数多くの表現で強い確約が与えられていたからだった。「第二楽長には、貴方の自由を制約されないものにする任務があります」。あるいは「貴方が行ったり来たりする完全な自由を十分に私が強調してきたか、よくわかりません」（1879年11月5日）。この計画をビューローが大公にではなく、まずマンシュテットに伝え、大公はマンシュテットを通して知ったことが、ビューローに対する反感を引き起こした。というのは、「ヒュルゼン・サーカス」の一件による不快感と結びついて、さらなる怒りの発露となったからだ。拒否するような調子で、大公はビューローの「総監督職」の続行を要求し、「自分の演奏旅行のための休暇が、今後、貴方に欠けるべきではない」という見解からの唐突な変化がビューローを驚かせた。この態度の変化にビューローはすぐに対抗しなければならなかったのだが、疲労が重なり、その力がなかった。「大公は私からまるまる12月〔に仕事をする〕ことを要求した」と絶望したビューローはヴォルフに書いた。ヴォルフは有利な条件のロシア演奏旅行が駄目になるのを見るしかなかった。

当初のヘルトブルク夫人の誓いはどこへ行っただろう？「当地の楽団は貴方の楽団であるべきです。貴方の国外での活動を我々は自明のものとしてお認めするものですが、それと並行して楽団を好きなようにしていいのです。こうした拘束されないやり方で十分に可能ですよね？」大公はそもそも何も「求める」ことはしないという話が、すっかり忘れ去られたのだ。というわけで、ブロンザルトの1879年末の予言には、先見の明があった。「状況が変われば、大公の個人的な共感が別の色合いを帯びてくるでしょう。支配者である君主は、職務で雇われた人とは決して同じ権利に基づく農民のような友好関係を築くことはできないでしょう」。ビューロー自身、1882年にはすでに次のように確認していた。「功績が認められることなど、ここではまだ習慣になっていない」。

とはいえ、ビューローが辛抱強く続けたことが結果として幸いした。彼と彼の楽団には、最も素晴らしい勝利が目前に迫っていたからである。場所はミュンヘンとヴィーンだった。ミュンヘンでは、ブラームスへの「正当な評価」がビューローを喜ばせ



たが、ヴァーグナー崇拜の地ミュンヘンがブラームスに対しては拒否的であっただけに、その喜びは一層強かった。ヴィーンでは、世界的に有名なヴィーン・フィルに対して〔小編成のオーケストラで〕挑戦したことが、「死を恐れぬ勇氣」と見なされ、「ビューローはあえて挑戦し、あらゆる偏見に見事に打ち勝った」と評された。マイニンゲンの演劇と比較すれば、わかりやすいであろう。その原則は「全体的効果のために個性を消すことで、劇では必然的かつ根源的な意図に導かれなければならない。マイニンゲン宮廷楽団で最も素晴らしい勝利が初めて祝われ、それも聴衆を圧倒させるような個々の楽員の意志力のおかげである」。この点で、弦楽器奏者の人数が少ないことは問題ではない。「その上、コントラバスが森のように鎮座している」〔ビューロー時代の宮廷楽団の写真を見ると、第1ヴァイオリンが8名前後なのに、コントラバスが5本、弦楽器の後方で横一列に並んでいる〕。「オーケストラ全体がビューローの自在に演奏する大きな楽器である」。「恣意的」という言い方は不当であろう。「総譜の忠実な再現がビューローにとってはまず第一であり、最も大事な事柄なのだから」。

「私は皆さんの素晴らしいヴィーン・フィルのような能力を自由には使えません」とビューローはヴィーンのヴァーグナー協会の代表に語った。「私から《ファウスト序曲》のスケッチしか期待してはいけません。しかし、いいスケッチです」。「真の内的生命、歌う心が欠けていたら、美しい音の輝くような装いは何の役に立つのでしょうか？」様々な言い方で繰り返されたこうした発言から、音楽的な事柄には絶対確実な感性を有するヴィーンの人々が、どうして伝統を無視して、ベートーヴェンの《交響曲第8番》のアレグレット〔第2楽章〕のあと、「拍手喝采の嵐」でアンコールを要求したのかもわかる。ビューローはいつもはそうしたアンコールは決してしなかった。

二人の評論家の敵意に満ちた非難—シュパイデルは《エグモント》序曲の演奏を「完全な失敗」と評した—のせいで、二回目のコンサートの入りが悪かったと思ったビューローは、無報酬の特別コンサートを開催して主催者に損害を補填しようとした。このコンサートの最後に簡単なスピーチをして、「フレムデンブラット」紙で「フレムデ（よそ者）」である自分が非難された《エグモント》序曲の代わりに、別の曲を演奏しようと述べた。すると《エグモント》の演奏を求める喧騒が巻き起こった。

四回目の最後のコンサートでは、ルビンシテイン以来、どのアーティストもヴィーンではもらったことのないような歓呼の喝采がビューローに与えられた。プログラムから外れない約束をビューローから警察が取りつけたという動作を、ビューロー独特のパパゲーノの身振りで無言で表現した〔ヴィーンでのコンサートの詳細は補足資料3を参照〕。

1884年12月5日のツアー最後のドレスデンでのコンサートは、36日間のツアーで31回目の公演だったが、誰も予想できなかったような出来事が付随した。「私の中から生み出される力は、一種の急性発作、熱による忘我状態である。同じような状態は持続不可能だし、反作用を引き起こす」。これがビューローの能力について肉体的な面から驚愕した人たちへの彼の回答だった。毎晩のコンサート、夜行列車での移動、風の吹き抜ける粗末なレストラン、こうした環境では、オーケストラの正規編成すら保障されないこともあった。不十分な編成では、演奏効果は会場の条件に左右された。また大公の宮殿の財政を考えて、ビューローは協奏曲の独奏もたびたび担当した。こうした活動は彼をすっかり消耗させたが、演奏旅行直後のマイニンゲンでのコンサートをマンシュテット楽長に代わって指揮してもらうことはできなかった。大公との夏の協議で自由にはできないと感じたからである。数ヶ月後、ビューローは同様の肉体的苦痛のあと、手紙を書いてきたこともあった。「私は数日、完全に休養しなければならない。23回のコンサートの間、毅然としてきたが、今はもう消耗した」。同じような状態の中、マイニンゲンの劇団がちょうど客演していたドレスデンから、24時間付き添うように彼は私に要求した。マイニンゲンでのコンサート〔12月7日〕を聴き、三ヵ月ぶりの夫婦での生活を味わおうとした。そこで問題となったのは、一晚だけ端役出演を免除してもらうことだった。端役出演は劇団員全員の職務であった。ビューローは私よりもそのことを気にし、私への「今日と5月のすべての晩は、『シーザー』で端役出演をするようにという卑劣な命令に激しく激怒」（1882年）したこともあった。しかし「マイニンゲン主義」の重要性を考慮し、それに伴う負担や役者としての成長を阻害する要因があったとしても、私は当初から出演免除の要請はほとんどしなかった。今回の場合、私には理由があり、許可は当然のことに思われ、まったく疑いさえしなかった。総監督クロネクへの口頭での申し出で許可はすぐにおりた

が、大公が事後承諾を与えるという条件つきだった。我々がまだちょうどいい時間にマイニンゲンに到着できる最後の列車に乗ったとき、問題なくマイニンゲンに戻れると思っていた。しかし、きわめて正当な期待を嘲笑するかのように我々を急襲したのは、回りくどい言い方での不許可だった。私はそれに従い、ビューローの〔マイニンゲンでの〕コンサートの前に〔電報を受け取ったアイゼナハから〕すぐにドレスデンに戻った。晩に〔シラーの『メアリ・ステュアート』の〕エリーザベト役で出演しなければならなかった日の朝だった。私は劇場で自分が出演する場面の〔代役による〕練習を見た。私を迎えたこうした仕打ちへの説明を求めることも不可能だった。事の展開を落ち着いて待つことなど、ビューローの性格では残念ながら無理な話で、彼は私の解雇と同時に自分の解雇も要求した<sup>(2)</sup>。しかしビューローの辞意は撤回させられた。1885年の東プロイセンへの演奏旅行など、すでに楽団のいくつかの演奏旅行が決定済みだったからだ。オーケストラの演奏にはとても満足で、次のように語っていた。「この職務にこれからも身を捧げようとしなければ、音楽の世界への罪であろう」。「純粹理性の街〔カントが住んでいたケーニヒスベルク〕では、ジムロック（ブラームスの出版者）の福音書を伝道し、成果をあげた」。その前の「ダンツィヒの人々は激しく熱狂し、ブラームスの《交響曲第2番》の第3楽章がアンコールされねばならなかった」。「エルビングでブラームスの最新作〔交響曲第3番〕、古典派作曲家の古い有名な作品もまだ演奏されないような街だが、大胆な選曲が電撃的な成功を引き起こした」と彼はまた上機嫌だった。

ピアニストとして25年もご無沙汰していたバリで4月、ビューローは5回のコンサートを開催した〔バリでのコンサートの詳細は補足資料4を参照〕。この街のシレーネの古い魔法がまた彼の想像力に作用し、彼にはすべてがバラ色の光に照らされているように見えた〔《タンホイザー》の冒頭のヴェーヌスベルクの場面は、ト書きに「洞窟全体がバラ色の光

(2) この出来事に関しては、「マイニンゲン主義」の厳格さの例であるとする誤った記述が、何十年にもわたって新聞記事で書かれてきた。ビューロー書簡集の「マイニンゲン」の巻には事情が正しく記されているにもかかわらず、誤った記述を踏襲する本がまだある。例えば、Mar GruberのJugenderinnerungには「ビューロー夫人がエリーザベトとテルツキー伯爵夫人の『端役』出演を拒否し、ビューローがこれを官房の重要問題にしたとき、大公は自分が高く評価していたこの芸術家夫妻の辞職願いにすぐに同意した」（199～200頁）と記されている。

に照らされている」と書かれ、シレーネたちの合唱が歌われる。ビューローは1860年3月20日、テュイルリー宮殿でのコンサートでヴァーグナーの《タンホイザー》の「ヴァルトブルク城への客の入場」のリストによるトランスクリプションを演奏した。また、《タンホイザー》のパリ版初演は1861年3月13日で、ビューローも同行している。それを理解したレベルの高い聴衆も確かに大勢おり、ここではもはやひとりの「ピアニスト」だけの問題ではなかった。それはプログラム最初の置かれたベートーヴェンのト長調の《ピアノ協奏曲〔第4番〕》の最初の小節で明白だった。しかし、一流音楽家たちの決然としたビューローへの支持表明がまったくなかった。ビューローはドイツではベルリオーズからサン＝サーンスにいたるフランスの巨匠に対し、行動でも文章でもかなり初期から彼独自の激しさと説得力で支持を表明し、ごく最近でも、同国人から敵視を受けたこともあった。今回、サン＝サーンスなどは、熱狂した会場にビューローが登場しても、身動きもせずに座り、手を動かすこともなかった。他の巨匠たちも同じだった。ビューローがそれを気にもとめなかったのは、社交的には何とか形が整ったからだだった。しかし、彼の高潔な心情には、「同僚たち」の振る舞いの狭量さ、ごちなさ、俗物さに気がつかないわけにはいかなかった。

またマイニンゲンに戻ると、自分のポストの後継者問題を真剣に考えるようになった。「志願者が集中豪雨のように押し寄せています。ヴァインガルトナー、ニコデマーラー、ツンベなど」。ビューロー自身の選択は、ミュンヘン宮廷楽団の優れたホルン奏者の息子で、まだ22歳のリヒャルト・シュトラウスだった。父は最も激しいヴァーグナー敵対者のひとりで、1860年代には何度もオーケストラの中で、ビューローに仕事をやりにくくさせていた。若きシュトラウスは自作の作品、《ホルン協奏曲》作品11、《交響曲》作品12、《管楽器のためのセレナード》で売り込んだが、最後の二曲はマイニンゲン宮廷楽団でも演奏された。ビューローの個人的な推薦で1885年10月18日、モーツァルトの《ピアノ協奏曲〔第24番〕》の独奏者として紹介された。それも、純粋で偉大な才能に対して示すだけではなく、心から感じた自発的な真心が伴ったものだった。シュトラウスの10月のブラームスの前でのデビューが終わると、ビューローはヴォルフに報告した。「彼の交響曲は十分に立派です。しかし彼は天性の指揮者でもあり、その気があれば、すぐに私の後継者になれます」。まさに

この時期、ブラームスの《交響曲第4番》の練習と初演が行われ、若きシュトラウスはこの作品に心からの共感を覚え、すっかり魅了されたようだった。私はシュトラウスの次のような描写を思い出す。アンダンテ〔第2楽章〕は、私に葬列のイメージを呼び起こす。月の光に照らされた高台や低地を葬列は静かに前進していく。

マイニンゲンで1885年10月25日、ブラームス自身の指揮で行われた初演そのものは、すべての参加者にとって祝賀行事のようだった。ビューローもまたこの楽団に対する喜びと、楽団に対しての長年の努力が実った果実を味わい尽くした。ビューローのブラームス礼賛の頂点となったこの交響曲の演奏は、宮廷楽団とともに到達した絶頂のように彼には思われた。この意義深い新作が間近に迫ったライン・ツアーとオランダ公演で最初にマイニンゲンの楽団により、しかも作曲家の立ち合いのもとで演奏されることは、ビューローに誇らしげな満足感をもたらした。その提案はブラームス自身によりなされた。プログラム、日程、公演地はブラームスの同意を得て計画された〔このツアーの概要は補足資料5を参照〕。ブラームスの参加に伴う配慮は慎重になされ、大げさにすら思われた。〔ツアー初日11月3日の〕フランクフルトでの《マイスタージンガー》前奏曲のあと、「嵐のような拍手が起こったが、ブラームスに配慮し、聴衆の求めに応じてステージにまた戻ることはせず、拍手は鳴りっ放しにした」。あるいは、「ブラームスのために〔11月23日の〕ケルンでは、我々は大きな大砲をぶっ放すことができない、例えばヴァーグナーの前奏曲などを演奏できないのだ」。「ブラームスは《四番》の前に派手な曲の演奏は望まない」。これらはすべて、私への私信に内密に書かれたものである。同様の記述はまだまだ見られる。「《四番》は退屈になり始めた。この曲はプログラム全体をモノトーンな光で染める（脱色させると言っているかもしれない）からである」。しかし、プログラム全般についても言及がある。「我々は演奏される作品のすべてにうんざりする」。「このような手回しオルガンを毎晩続けるのはもう閉口だ。昔の作品に芸術的に夢中になれるほど、私は虚栄心が強く拍手喝采を渴望しているわけではない。名演奏家の呪いが今ほどはっきりわかったことはなかった」。もしブラームスがいれば、ビューローのこうした嫌悪感を抑えてくれたであろう。またロッテルダムでの《エグモント》序曲のように、オランダの聴衆を演奏で煙ですすけたような無関心さから燃え立つような精神状態に駆り立てることに成功

すれば、そうした気持ちも克服できた。若い頃のビューローはすでに次のように述べている。「あらゆる単調さの中で最も恐ろしいのは、崇高なものの単調さである」。そうしたことがあったにせよ、ビューローの知らない間でのブラームスの勝手な振る舞いがなければ、これがビューローの宮廷楽団との最後の演奏旅行になることはなかったであろう。ブラームスは古くからの友人たちがマイニンゲンでの活動を不満に思っていたことを不愉快に感じたのか、宮廷楽団のフランクフルトでの〔11月24日の〕コンサートで《交響曲第4番》演奏されない場合、ブラームスがフランクフルト博物館管弦楽団のコンサートで《交響曲第4番》を指揮するように依頼されているとビューローに手紙を書いた。「私がこの件で貴兄にご相談しなかったのは、自分の愚かさを償うことができるからです。フランクフルトの人たちは私に対して丁寧なので、私の軽率で無思慮だった行為には自分でも怒っています。愚かさやそれにまつわるものすべて、汝の名はブラームス」。

ビューローが5年間のマイニンゲンでの活動でブラームスの作品を認知させ普及させるために尽力してきたこと、しかもこれまでのどれをも凌駕する成果をあげたことすべてに対するこのような報いは、自分の「使い走り」としての役割りを「伝道師」、すなわち偉大な作品の作曲家に従属する控え目な態度で演じてきただけに、ビューローを深く傷つけたに違いなかった。それだけに一層、あのヨアヒムが持っていたような落ちついた観察眼がビューローに欠けていたのは意外だった。ヨアヒムはブラームスと緊密な関係にあり崇拜していた若い頃、すでに次のように書いていた。「ブラームスは根っからのエゴイストだと考えてもいい。すべてが天賦の才能からまったく心配もなく、彼の楽天的な性格から溢れ出ることを知らないのであろう。しかしときどき、勝手気ままが無教育を露呈して人を傷つける」。こうした問題をうまく切り抜けるのは、ビューローにとってはヨアヒムより難しかった。若い頃から数十年にわたって築かれたような堅固な友情関係がビューローとブラームスとの間にはなかったからである。だからこそ、「同時代の人々ばかりではなく、もうすでに後世にも名を残す」ようになったことへのブラームスの満足には、多少の苦い思いも入り混じっていたのかもしれない。それは煩わしい恩義の感情で高まったが、ビューローの価値を認識していても、つらい子供時代や青年時代の体験から不愛想で疑い深くなった人間には、

恩義の気持ちなどなくなってしまうのだろう。

優れた音楽活動とはいえ、義務的に毎日「演奏を繰り返す」ことはビューローの純粋な芸術家的性格に反し、そうした一時的な倦怠感と結びついて生じた衝突から、すでに何度か提出していた辞表を強い意志でまた提出し、今度は認められるに違いなかった。この年の夏にはもう、ビューローはヴォルフに手紙を書いていた。「このシーズンを私が最後まで何とか持ちこたえられたのは、ミュンヘン、ハノーファー、マイニンゲンでの指揮者としての私の最後の擬似的創造活動への忠誠だった」。オーケストラ芸術の発展と普及、指揮者という職業の価値を決定的なものにしたこの重要な時期がこうして終わりを告げた。

### 【訳者補足資料】

ビューローの演奏会のデータは、次の文献を参照した。

Birkin, Kenneth: Hans von Bülow. A Life for Music. Cambridge. 2011.

1. 1880 年秋からのマイニンゲンでのベートーヴェン演奏会のプログラムは下記の通り。
- 11 月 7 日 序曲《コリオラン》、交響曲第 1 番、ロマンス第 1 番ト長調、  
《エグモント》序曲、交響曲第 2 番
- 11 月 14 日 序曲《命名祝日》、三重協奏曲、ロンディーノ変ホ長調、  
《プロメテウス》序曲、交響曲第 3 番
- 11 月 21 日 悲歌 Op. 118、《献堂式》序曲、交響曲第 4 番、  
《シュテファン王》序曲、交響曲第 5 番
- 11 月 28 日 序曲《レオノーレ第 1 番》、  
《フィデリオ》より「神よ、ここは何と暗いのだ」、  
ピアノ協奏曲第 4 番、ロマンス第 2 番ヘ長調  
《アデライーデ》Op. 46、交響曲第 6 番
- 12 月 5 日 《フィデリオ》序曲、《フィデリオ》より「悪者よ!」、  
ヴァイオリン協奏曲、《ああ、不実な者よ》、交響曲第 7 番
- 12 月 12 日 交響曲第 8 番、《静かな海と楽しい航海》、序曲《レオノーレ第 3 番》、



《アテネの廃墟》の序曲と付随音楽、合唱幻想曲

12月19日 交響曲第9番（2回演奏）

12月25日 ピアノ協奏曲第5番、ピアノ・ソナタ第14番「月光」、  
交響曲第3番

12月27日のアイゼナハでのコンサートのプログラムは下記の通り。

序曲《コリオラン》、ピアノ協奏曲第4番、ロンディーノ変ホ長調  
《エグモント》序曲、交響曲第7番

2. 1882年1月のベルリンでのコンサートの日程とプログラムは下記の通り。

1月4日 ベートーヴェン：序曲《コリオラン》、交響曲第1番、  
《エグモント》序曲、交響曲第7番

1月5日 ベートーヴェン：《献堂式》序曲、三重協奏曲、交響曲第3番

1月6日 ベートーヴェン：交響曲第4番、序曲《レオノーレ第1番、第3番》、  
交響曲第5番

1月7日 メンデルスゾーン：序曲《静かな海と楽しい航海》、ヴァイオリン協奏曲、  
序曲《フィンガルの洞窟》、華麗なカプリッチョ、  
交響曲第3番「スコットランド」

1月8日 ブラームス：悲劇的序曲、ピアノ協奏曲第2番、  
交響曲第1番

1月9日 ブラームス：ピアノ協奏曲第1番、ハイドンの主題による変奏曲  
セレナーデ第2番、大学祝典序曲

1月16日 ベートーヴェン：序曲《命名祝日》、交響曲第1番、  
《フィデリオ》序曲、交響曲第6番

1月17日 ベートーヴェン：《シュテファン王》序曲、ピアノ協奏曲第5番  
ロンディーノ変ホ長調、《プロメテウス》序曲、  
交響曲第8番

1月18日 ベートーヴェン：《エグモント》序曲、交響曲第5番、  
交響曲第7番、序曲《レオノーレ第3番》

## 3. 1884 年秋のヴィーンでのコンサートの日程とプログラムは下記の通り。

11 月 20 日 ベートーヴェン：序曲《コリオラン》、交響曲第 1 番

ロンディーノ変ホ長調、大フーガ

《エグモント》序曲、交響曲第 5 番

11 月 25 日 ラフ：《堅き砦》序曲

ブラームス：ピアノ協奏曲第 1 番

ヴェーバー：《魔弾の射手》序曲

ブラームス：交響曲第 3 番

ベートーヴェン：序曲《レオノーレ第 1 番、第 3 番》

12 月 1 日 ヴェーバー：《オベロン》序曲

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第 4 番

ラフ：組曲第 3 番ホ短調 Op. 72

ショパン：夜想曲ト長調 Op. 37-2, スケルツォ嬰ハ短調 Op. 39,

子守唄変二長調 Op. 57

リスト編曲：さすらい人幻想曲

ベートーヴェン：《エグモント》序曲

12 月 2 日 ベルリオーズ：序曲《海賊》

ブラームス：ピアノ協奏曲第 2 番

ヴァーグナー：ファウスト序曲

ブラームス：ハイドンの主題による変奏曲

ベートーヴェン：交響曲第 8 番

ヴェーバー：《魔弾の射手》序曲

## 4. 1885 年春のパリでのコンサートの日程とプログラムは下記の通り。

4 月 12 日 ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第 4 番

ルビンシテイン：前奏曲とフーガ

ショパン：夜想曲ト長調 Op. 37-2

リスト：ハンガリー狂詩曲第 8 番、さすらい人幻想曲

- 4月17日 ブラームス：ピアノ・ソナタ第3番，8つの小品 Op. 76,  
 スケルツォ変ホ短調 Op. 4,  
 ハンガリーの歌の主題による変奏曲 Op. 21-2
- 4月19日 リスト：ハンガリー幻想曲  
 シューベルト：即興曲変ト長調 D. 899-3  
 ブラームス：スケルツォ変ホ短調 Op. 4  
 ショパン：即興曲嬰ヘ短調 Op. 36  
 リスト：「ヴェネツィアとナポリ」より2曲
- 4月22日 バッハ：イタリア風協奏曲，イギリス組曲より3曲  
 ヘンデル：前奏曲とフーガ，シャコンヌ，組曲より2曲  
 モーツァルト：幻想曲ハ短調 K. 396  
 ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第18番  
 ラフ：組曲第3番ホ短調 Op. 72  
 ショパン：夜想曲ホ長調 Op. 62-2，即興曲変ト長調 Op. 51,  
 ポロネーズ嬰ヘ短調 Op. 44
- 4月29日 ブラームス：ピアノ・ソナタ第3番  
 バッハ：半音階的幻想曲とフーガ  
 ベートーヴェン：「森の乙女」のロシア舞曲の主題による12の変奏曲，  
 バガテル Op. 126,  
 ロンド・ア・カプリッチョ長調 Op. 129  
 ルビンシテイン：バルカローレイ短調 Op. 93-4  
 ビューロー：即興曲「蜥蜴」Op. 27  
 チャイコフスキー：創作主題と変奏 Op. 19-6  
 ラインベルガー：メヌエットとフゲッタ Op. 113  
 ショパン：夜想曲変ホ長調 Op. 55-2，スケルツォホ長調 Op. 54,  
 マズルカ Op. 50 & Op. 56  
 ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第23番「熱情」

5. 1885 年秋のツアーの日程と主な公演のプログラムは下記の通り。

11 月 3 日 フランクフルト

ベートーヴェン：《フィデリオ》序曲，交響曲第 6 番

ヴァーグナー：《マイスタージンガー》前奏曲

ブラームス：交響曲第 4 番（ブラームス指揮）

11 月 4 日 ジーゲン    11 月 5 日 ドルトムント    11 月 6 日 エッセン

11 月 7 日 エルバーフェルト    11 月 8 日 ビーレフェルト

11 月 9 日 デュッセルドルフ    11 月 10 日 ロッテルダム

11 月 11 日 ユトレヒト    11 月 12～13 日 アムステルダム

11 月 14 日 ハーグ    11 月 15 日 ハールレム    11 月 16 日 アーネム

11 月 17 日 ユトレヒト    11 月 18 日 ハーグ    11 月 19 日 ロッテルダム

11 月 20 日 アムステルダム    11 月 21 日 クレーフェルト    11 月 22 日 ボン

11 月 23 日 ケルン

ベートーヴェン：序曲《命名祝日》，交響曲第 4 番

ブラームス：交響曲第 4 番（ブラームス指揮）

ベルリオーズ：序曲《リア王》

Birkin では 11 月 24 日にビューローはツアーを放棄し，ブラームスが代わりに指揮したと書かれているが，誤りであろう。以下の 2 日分のデータは次の文献による。

Gewande, Wolf-Dieter: Hans von Bülow. Lilienthal. 2004.

11 月 24 日 フランクフルト

ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲

サン＝サーンス：交響曲第 2 番

ベートーヴェン：交響曲第 7 番（ブラームスの交響曲第 4 番から変更）

11 月 25 日 ヴィースバーデン（ツアー最終日）

## 【訳者付記】

ハンス・フォン・ビューロー（1830～94）は，1857 年に結婚したコージマをヴァーグナーに奪われ，1882 年に女優マリー・シャンツァー（1857～1941）と再婚した。

その経緯については本文中にも書かれているが、彼女はビューロー死後翌年の1895年から1908年にかけて、全7巻の膨大な量の夫の書簡集を出版するなど、ビューローの業績を後世に残すことに尽力した。1925年には、未亡人の立場からの評伝 *Hans von Bülow in Leben und Wort* を出版した。今回訳出したのは、この本のマイニンゲン時代について書かれた章である。近年、ビューローの再評価が進み、ビューローの評伝が相次いで出版されているが、未亡人の証言が（身びいきもあるにせよ）貴重であることは言うまでもない。

書簡などからの引用が多いのも特徴だが（ただし近年の評伝とは異なり、日付などのデータはあまり記載されていない）、ビューローの評伝を執筆したアラン・ウォーカーが「ビューローの文章は難解で迷宮のように入り組んだものが多く、予期しない方向へ話が進むことも稀ではない。ビューローの手紙はどれも内輪での駄洒落や才気あふれる言葉のひらめきの羅列を含んでいるので、ドイツ語を母国語とする人でさえ眩惑されがちである」と書いているほど、ビューローの手紙は難解である。夫人の文章も簡潔すぎて、同時代の読者にはすぐに理解できたとしても、現代の我々には理解の難しい個所も多い。そのため、訳者の判断で訳注を〔 〕で補足した。誤訳や誤読があれば、ご指摘いただければ幸いである。